

昭和
二年

林美美子集

昭和二十八年八月二十日 初版印刷
昭和二十八年八月二十五日 初版發行

昭和文學全集19
林 芙美子集

著者 林 芙美子

發行者 角 川 源 義

印刷者 仙葉元太郎

東京都新宿區東大久保二ノ七八

發行所

東京都千代田區
富士見町二ノ七

かど 角 川 書店
かは しよ てん

振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙 本州製紙株式會社
クロース 日本クロス工業株式會社
整版所 中光印刷株式會社
印刷所 中教印刷株式會社



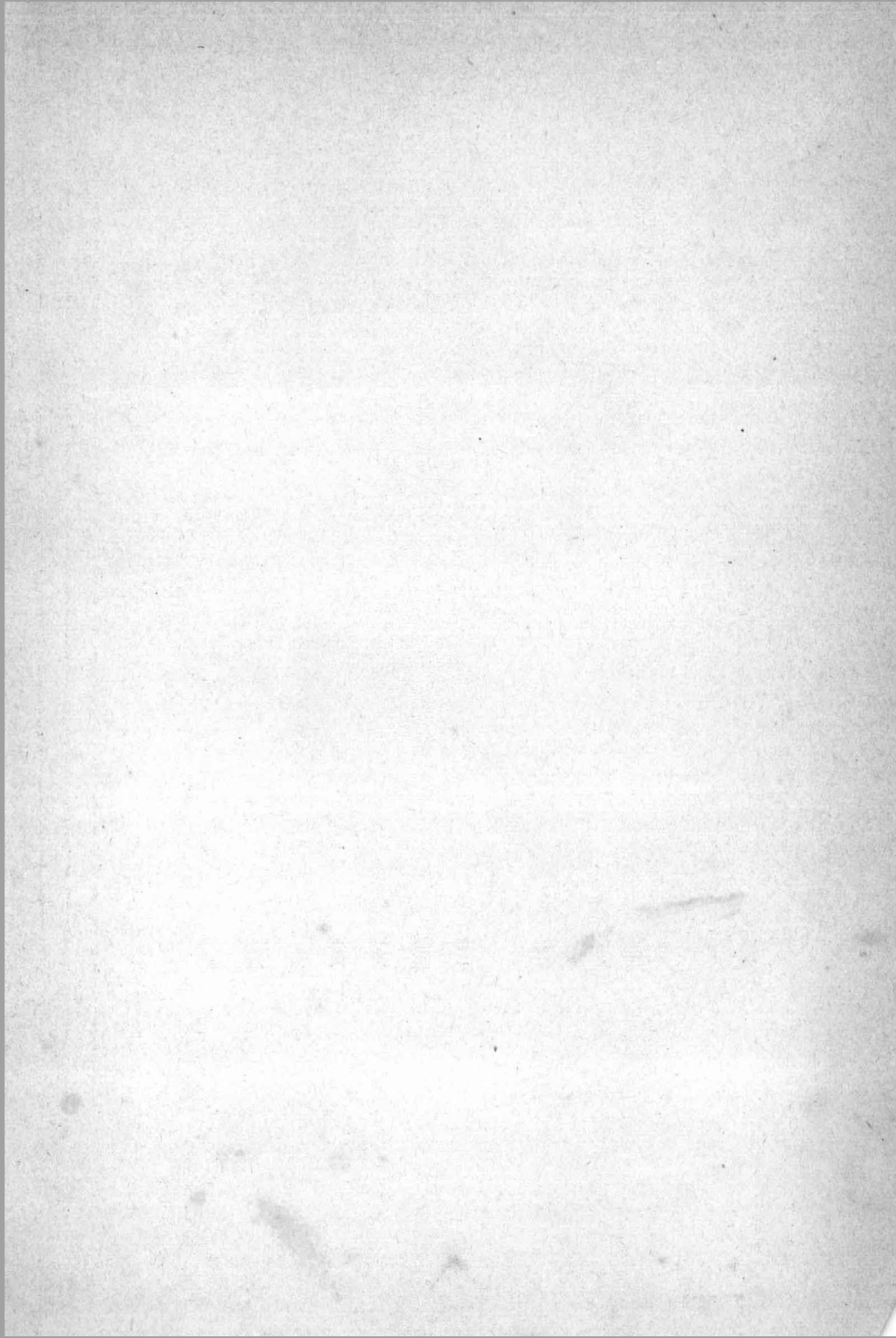
林
芙美子集

昭和文學全集
角川書店版

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



林
芙美子集

花のいのちは
みじかくて
苦しきことのみ
多かりき

林美雪子

放浪記（第一部）

放浪記以前

私は北九州の或る小學校で、こんな歌を習つた事があつた。

更けゆく秋の夜 旅の空の
佗しき思ひに 一人なやむ

戀ひしや古里 なつかし父母

私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない。父は四國の伊豫の人間で、太物の行商人であつた。母は、九州の櫻島の温泉宿の娘である。母は他國者と一緒になつたと云ふので、鹿兒島を追放されて父と落ちつき場所を求めたところは、山口縣の下關と云ふ處であつた。私が生れたのはその下關の町である。——故郷に入れられなかつた両親を持つ私は、したがつて旅が古里であつた。それ故、宿命的に旅人である私は、この戀ひしや古里の歌を、随分佗しい氣持ちで習つたものであつた。——八つの時、私の幼い人生にも、暴風が吹きつけてきたのだ。若松で、呉服物の耀賣をして、かなりの財産をつくつて

ゐた父は、長崎の沖の天草から逃げて來た瀆と云ふ藝者を家に入れてゐた。雪の降る舊正月を最後として、私の母は、八つの私を連れて父の家を出てしまつたのだ。若松と云ふところは、渡し船に乘らなければ行けないところだと覺えてゐる。

今の私の父は養父である。このひとは岡山の人間で、實直過ぎるほどの小心さと、アブノーマルな山ッ氣とで、人生の半分は苦勞で埋れてゐた人だ。私は母の連れ子になつて、此父と一緒にになると、ほとんど住家と云ふものを持たないで暮して來た。どこへ行つても木賃宿ばかりの生活だつた。「お父つあんは、家を好かんとぢや、道具が好かんとぢや……」母は私にいつもこんなことを云つてゐた。そこで、人生いたるところ木賃宿ばかりの思ひ出を持つて、私は美しい山河も知らないで、養父と母に連れられて、九州一圓を轉轉と行商をしてまはつてゐたのである。私のはじめて小學校へはいつたのは長崎であつた。ざつこく屋と云ふ木賃宿から、その頃流行のモスリンの改良服と云ふのをきせられて、南京町近くの小學校へ通つて行つた。それを振り出しにして、佐世保、久留米、下關、門司、戸畑、折尾と言つた順に、四年の間に、七度も學校をかはつて、私には親しい友達か一人も出來なかつた。

せつばつまつた思ひで、私は小學校をやめてしまつたのだ。私は學校へ行くのが厭になつてゐたのだ。それは丁度、直方の炭坑町に住んでゐた私の十二の時であつたらう。「ふうちゃんにも、何か賣らせませうたいなあ……」遊ばせてはモッタイナイ年頃であつた。私は學校をやめて行商をするやうになつたのだ。

*

直方の町は明けても暮れても煤けて暗い空であつた。砂で漉した鐵分の多い水で舌がよれるやうな町であつた。大正町の馬屋と云ふ木賃宿に落ちついたのが七月で、父達は相變らず、私を宿に置きつばなしにすると、荷車を借りて、メリヤス類、足袋、新モス、腹巻、さういつた物を行李に入れて、母が後押して炭坑や陶器製造所へ行商に行つてゐた。

私には初めての見知らぬ土地であつた。私は三錢の小遣ひを貰ひ、それを兵兒帶に巻いて、毎日町に遊びに出てゐた。門司のやうに活氣のある街でもない。長崎のやうに美しい街でもない。佐世保のやうに女のひとが美しい町でもなかつた。骸炭のザクザクした道をはさんで、煤けた軒が不透明なあくびをしてゐるやうな町だつた。駄菓子屋、うどんや、屑屋、貸蒲團屋、まるで荷物列車のやうな町だ。その店先には、町を歩いてゐる女とは正反對の、これは又不健康な女達が、尖つた

目をして歩いてゐた。七月の暑い陽ざしの下を通る女は、汚れた腰巻と、袖のない襦袢きりである。夕方になると、シヤベルを持った女や、空のモッコをぶら下げた女の群が、三三五々しやべくりながら長屋へ歸つて行つた。

流行歌のおいと、こさうだよの唄が流行つてゐた。

私の三錢の小遣ひは、双兒美人の豆本とか、米饅頭のやうなもので消えてゐた。——間もなく私は小学校へ行くかはりに、須崎町の粟おこし工場に、日給二十三錢で通つた。その頃、米をさげて買ひに行つてゐた米が、たしか十八錢だつたと覚えてゐる。夜は近所の貸本屋から、腦の喜三郎や横紙破りの福島正則、不如歸、なごぬ仲、渦巻などを借りて讀んだ。さうした物語の中から何を教つたのだらうか？ メデタシ、メデタシの好きな、蟲のいゝ空想と、ヒロイズムとセンチメンタリズムが、海綿のやうな私の頭をひたしてしまつた。私の周囲から朝から晩まで金の話である。私の唯一の理想は、女成金になりたいと云ふ事だつた。雨が何日も降り續いて、父の借りた荷車が雨にさらされると、朝も晩も、かぼちや飯で、茶碗を持つのがほんたうに淋しかった。

この木賃宿には、通稱シンケイ（神經）と呼んでゐる、坑夫上りの狂人が居て、このひとはダイナマイトで飛ばされて馬鹿になつた人だと宿の人が云つてゐた。毎朝早く、町の女達と一緒にトロッコを押しに出かけて行く氣立の優しい狂人である。私はこのシンケイによく風を取つてもらつたものだ。彼は後で支村夫に出世したけれど、外に、島根の方から流れて來てゐる祭文語りの善眼の男、夫婦者の坑夫が二組、まむし酒を賣るテキヤ、親指のない淫賣婦、サーカスよりも面白い集團であつた。

「トロッコで厭されて指を取つた云ひよるけど、嘘ばんだ、誰ぞに切られたつとちやろ……」

馬屋のお上さんは、片眼で笑ひながら母にかう云つてゐたものだ。或る日、この指のない淫賣婦と私は風呂に行つた。ドロドロの苦むした暗い風呂場だつた。この女は、腹をぐるりと一巻きにして、臍のところを朱い舌を出した蛇の文身をしてゐた。私は九州で初めてこんな凄い女を見た。私は子供だつたから、しみじみ正視してこの薄青いこはい蛇の文身を見てゐたものだ。

木賃宿に泊つてゐる夫婦者は、たいてい自炊で、自炊でない者達も、米を買つて來て炊いてもらつてゐた。

はうろくのやうに焼けた暑い直方の町角に、そのころカチャシヤの繪看板が立つやう

になつた。異人娘が、頭から毛布をかぶつて、雪の降つてゐる停車場で、汽車の窓を叩いてゐる圖である。すると間もなく、頭の眞ん中を二つに分けたカチャシヤの髪が流行つて來た。

カチャシヤ可愛いや 別れの辛さ
せめて淡雪 とけぬ間に
神に願ひを ラ、かけませうか。

なつかしい唄である。この炭坑街にまたゝく間に、このカチャシヤの唄は流行してしまつた。ロシヤ女の純情な戀愛はよくわからなかつたけれど、それでも、私は映畫を見て來ると、非常にロマンチックな少女になつてしまつたのだ。浮かれ節（浪花節）より他に芝居小屋に連れて行つてもらへなかつた私が、たつた一人で隠れてカチャシヤの映畫を毎日見に行つたものであつた。當分は、カチャシヤで夢見心地であつた。石油を買ひに行く道の、白い夾竹桃の咲く廣場で、町の子供達とカチャシヤごつこや、炭坑ごつこをして遊んだりもした。炭坑ごつこの遊びは、女の子はトロッコを押す眞似をしたり、男の子は炭坑節を唄ひながら土をほじくつて行くしぐさである。

そのころの私はとても元氣な子供だつた。

一ヶ月ばかり動めてゐた栗おこし工場の一十三錢也にもさよならをすると、私は父が仕入れて来た、扇子や化粧品を鼠色の風呂敷に背負つて、遠賀川を渡り隘道隘道を越して、炭坑の社宅や坑夫小屋に行商して歩くやうになつた。炭坑には、色々な行商人が這入り込んでゐるのだ。

「暑うしてたまらんなア。」この頃私には、かうして親しく言葉をかける相棒が二人ばかりあつた。「松ちやん」これは香月から歩いて来る駄菓子屋で、可愛い十五の少女であつたが、間もなく、青島へ藝者に賣られて行つてしまつた。「ひろちやん」干物屋の賣り子で、十三の少年だけれど、彼の理想は、一人前の坑夫になりたい事だつた。酒が呑めて、ツルハシを一寸高く振りかざせば人が驚くし、町の連鎖劇は無料でみられるし、月の出た遠賀川のはつりを、私はこのひろちやんたちの話を聞きながら歸つたものだつた。——その頃よく均一と云ふ言葉が流行つてゐたけれど、私の扇子も均一の十錢で、鯉の繪や、七福神、富士山の繪が描いてある。骨はがんちやうな竹が七本ばかりついてゐる。毎日平均二十本位はかたづけけていつた。緑色のペンキのけた社宅の細君よりも、坑夫長屋をまはつた方がはるかに扇子はさばけていつた。外にラッパ長屋と云つて、一棟に十家族も住んでゐる鮮人長屋もあつた。アンペラの疊の上には玉葱をむいたやうな子供達が、裸で重

なりあつて遊んでゐた。

烈々とした空の下には、掘りかへした土が口を開けて、雷のやうに遠くではトロッコの流れる音が聞えてゐる。晝食時になると、蟻の塔のやうに材木を組みわたした暗い坑洞口から、泡のやうに湧いて出る坑夫達を待つて、幼い私はあつちこつち扇子を賣りに歩いた。坑夫達の汗は水ではなくて、もう黒い餡のやうであつた。今、自分達が掘りかへした石炭土の上にゴロリと横になると、バクバクまるで金魚のやうに空気を吸つてよく眠つた。まるでゴリラの群のやうだつた。

さうしてこの静かな景色の中に動いてゐるものと云へば、棟を流れて行く昔風なモッコである。晝食が終るとあつちからもこつちからもカチウシヤの唄が流れて来てゐる。やがて夕顔の花のやうなカンテラの灯が、薄い光で地を這つて行くと、けたままし警笛サイレンの音だ。國を出るときや玉の肌……何でもない唄聲ではあるけれど、もうもうとした石炭土の山を見てゐると何だか子供心にも切ないものがあつた。

扇子が賣れなくなると、私は一つ一錢のアンパンを賣り歩くやうになつた。炭坑まで一里の道程を、よく休み休み私はアンパンをつまみ食ひして行つたものだ。父はその頃、商賣上の事から坑夫と喧嘩をして頭をグルグル手拭で巻いて宿にくすぼつてゐた。母は多

賀神社のそばでバナナの露店を開いてゐた。無數に驛からなだれて来る者は、坑夫の群である。一山いくらのバナナは割によく賣れて行つた。アンパンを賣りさばいて母のそばへ籠を置くと、私はよく多賀神社へ遊びに行つた。そして大勢の女や男達と一緒に、私も馬の銅像に祈願をこめた。いゝ事がありますやうに。——多賀さんの祭には、きまつて雨が降る。多くの露店商人達は、驛のひさしや、多賀さんの境内を行つたり來たりして雨空を見上げてゐたものだつた。

十月になつて、炭坑炭坑にストライキがあつた。街中は、ジンと鼻をつまんだやうに静かになると、炭坑から来る坑夫達だけが殺氣だつて活氣があつた。ストライキ、さりとは辛いね。私はこんな唄も覺えた。炭坑のストライキは、始終の事で坑夫達はさつさと他の炭坑へ流れて行くのださうだ。そのたびに、町の商人との取引は抹殺されてしまふので、めつたに坑夫達には品物を貸して歸れなかつた。それでも坑夫相手の商賣は、てつとり早くてユカイだと商人達は云つてゐた。

*
「あんたも、四十過ぎとんなはつとちやけん、少しは身を入れてくれんな、仕様がなかもんな……」

私は豆ランプの灯のかけで、一生懸命探偵

小説のジゴマを讀んでゐた。裾にさしあつて寝てゐる母が父に何時もかうつぶやいてゐた。外はながい雨である。

「一軒、家ちふもんを、定めんとあんだ、こぎやん時に困るけんな。」

「ほんにヤカマシかな。」

父が小聲で呟鳴ると、あとは又雨の音だつた。——そのころ、指の無い淫賣婦だけは、いつも元氣で酒を呑んでゐた。

「戦争でも始まるとよかな。」

この淫賣婦の持論はいつも戦争の話だつた。この世の中が、ひつくりかへるやうになるといふと云つた。炭坑にうんと金が流れて來るといふと云つてゐた。「あんたは、ほんまによか生れつきな」母にかう云はれると、指の無い淫賣婦は、

「小母つさんまで、そぎやん思うとんなはると……」彼女は窓から何か投げては淋しさうに笑つてゐた。二十五だと云つてゐたが、労働者上りらしいプチプチした若さを持つてゐた。

十一月の聲のかゝる時であつた。

黒崎からの歸り道、父と母と私は、大聲で話しながら、軽い荷車を引いて、暗い遠賀川の堤防を歩いてゐた。

「お母さんも、お前も車へ乗れや、まだまだ遠いけに、歩くのはしんどいぞ……」

母と私は、荷車の上に乗つかると、父は元氣

のいゝ聲で唄ひながら私達を引いて歩いた。

秋になると、星が幾つも流れて行く。もう

ぢき街の入口である。後の方から、「おつざんよつ！」と呼ぶ聲がした。渡り歩きの坑夫が呼んでゐるらしかつた。父は荷車を止めて

「何ぞ！」と呼應した。二人の坑夫が這ひながらついで來た。二日も食はないのだと云ふ。逃げて來たのかと父が聞いてゐた。二人

共鮮人であつた。折尾まで行くのだから、金を貸してくれと何度も頭をさげた。父は沈黙

つて五十錢銀貨を二枚出すと、一人づゝに握らせてやつた。堤の上を冷たい風が吹いて行

つてゐて、妙にガクガク私たちは慄へてゐたが、二人共一圓もらふと、私達の車の後を押

して長い事沈黙つて町までついで來た。

しばらくして父は祖父が死んだので、岡山へ田地を賣りに歸つて行つた。少し資本をこ

しらへて來て、唐津物を糶賣りをしてゐた。これが唯一の目的であつた。何によらず

炭坑街で、てつとり早く賣れるものは、食物である。母のバナナと、私のアンパンは、雨

が降りさへしなければ、二人の食べる位は賣れて行つた。馬屋の拂ひは月二圓二十錢で、

今は母も家を一軒借りるより此方が楽だと云つてゐた。だが、どこまで行つてもみじめ

ざる私達である。秋になると、神經痛で、母は何日も商賣を休むし、父は田地を賣つて

つた四十圓の金しか持つて來なかつた。父は

その金で、唐津焼を仕入れると、佐世保へ一人で働きに行つてしまつた。

「ぢき二人は呼ぶけんうのう……」かう云つて、父は陽に焼けた厚司一枚で汽車に乗つて行つた。私は一日も休めないアン

パンの行商である。雨が降ると、直方の街中を軒並にアンパンを賣つて歩いた。

このころの思ひ出は一生忘れることは出來ないのだ。私には、商賣は一寸も苦痛ではなかつた。一軒一軒歩いて行くと、五錢、一錢、

三錢と云ふ風に、私のこしらへた財布には金がたまつて行く。そして私は、自分がどんな

に商賣上手であるかを母に賞めてもらふのが樂しみであつた。私は二ヶ月もアンパンを賣

つて母と暮した。或る日、街から歸ると、美しいヒワ色の兵児帯を母が縫つてゐた。

「どぎやんしたと？」

私は驚異の眼をみはつたものだ。四國のお父つあんから送つて來たのだと母は云つてゐ

た。私はなぜか胸が鳴つてゐた。間もなく、呼びに歸つて來た義父と一緒に、私達三人

は、直方を引きあげて、折尾行きの汽車に乗つた。毎日あの道を歩いたのだ。汽車が遠賀

川の鐵橋を越すと、堤にそつた白い路が暮れそめてゐて、私の目に悲しくうつるのであつ

た。白帆が一ツ川上へ登つてゐる、なつかしい景色である。汽車の中では、金鎖や、指輪

や、風船、繪本などを賣る商人が、長い事しやべくつてゐた。父は赤い硝子玉のはいつた

指輪を私に買つてくれたりした。

(十二月×日)

さいはての驛に下り立ち

雪あかり

さびしき町にあゆみ入りにき

雪が降つてゐる。私はこの啄木の歌を偶つと思ひ浮べながら、郷愁のやうなものを感じてゐた。便所の窓を明けると、夕方の門燈が薄明るくついてゐて、むかし信州の山で見たしやくなげの紅い花のやうで、とても美しかつた。

「婢やアお嬢ちやんおんぶしておくれッ！」
奥さんの聲がしてゐる。

あゝあの百合子と云ふ子供は私には苦手だ。よく泣くし、先生に似てゐて、神経が細くて全く火の玉を背負つてゐるやうな感じである。——せめてかうして便所にはいつてゐる時だけが、私の體のやうな氣がする。

(バナナに鱈、豚カツに蜜柑、思ひきりこんなものゝ食べてみたいなア)

氣持ちが貧しくなつてくると、私は妙に落書きをしたくなつてくる。豚カツにバナナ、私は指で壁に書いてみた。

夕飯の支度の出来るまで赤ん坊をおぶつて廊下を何度も行つたり來たりしてゐる。秋江氏の家へ來て、今日で一週間あまりだけ

ど、先の目標もなささうである。こゝの先生は、日に幾度も梯子段を上つたり降りたりしてゐる。まるで廿日鼠のやうだ。あの神經には全くやりきれない。

「チャンチンコイチャン！ よく眠つたかい！」

私の肩を覗いては、先生は安心をしたやうにちんちんばしよりをして二階へ上つて行く。

私は廊下の本箱から、今日はチエホフを引っぱり出して讀んだ。チエホフは心の古里だ。チエホフの吐息は、姿は、みな生きて、黄昏の私の心に、何かブツブツものを言ひかけて來る。柔かい本の手ざはり、こゝの先生の小説を讀んでみると、もう一度チエホフを讀んでもいゝのにと思つた。京都のお女郎の話なんか、私には縁遠い世界だ。

夜。
家政婦のお菊さんが、臺所で美味しさうな五目醬司を拵へてゐるのを見てとても嬉しくなつた。

赤ん坊を風呂に入れて、ひとしづまりすると、もう十一時である。私は赤ん坊と云ふものが大嫌ひなのだけれど、不思議な事に、赤ん坊は私の背中におぶさると、すぐウトウトと眠つてしまつて、家の人達が珍らしがつてゐる。

お蔭で本が讀めること——年を取つて子供が出來ると、仕事を手につかない程心配に

なるのかも知れない。反感がおきる程、先生が赤ん坊にハラハラしてゐるのを見ると、女中なんて一生するものではないと思つた。

うまごやしにだつて、可憐な白い花が咲くつて事を、先生は知らないのかしら……。奥さんは野そだちな人だけれど、眠つたやうなひとで、この家では私は一番好きなきなひとである。

(十二月×日)

ひまが出るなり。

別に行くところもない。大きな風呂敷包みを持つて、汽車道の上に架つた陸橋の上で、貰つた紙包みを開いて見たら、たつた二圓はいつてゐた。二週間あまりも居て、金二圓也。足の先から、冷たい血がががるやうな思ひだつた。——ブラブラ大きな風呂敷包みをさげて歩いてゐると、何だかザラザラした氣持ちで、何もかも投げ出したくなつてきた。通りすがりに蒼い瓦葺きの文化住宅の貸家があつたので這入つてみる。庭が廣くて、ガラス窓が十二月の風に磨いたやうに冷たく光つてゐた。

疲れて眠たくなつてゐたので、休んで行きたい氣持ちなり。勝手口を開けてみると、錆びた鐘詰のくわんからがゴロゴロ散らかつてゐて、座敷の疊が泥で汚れてゐた。晝間の空家は淋しいものだ。薄い人の影があそこにもこゝにもたゞずんでゐるやうで、寒さがしみる

じみとこたへて来る。どこへ行かうと云ふあてもないのだ。二圓ではどうにもならない。はゞかりから出て来ると、荒れ果てた縁側のそばへ狐のやうな目をした犬がぢつと見てゐた。

「何でもないんだ、何でもありやしないんだよ。」

言ひきかせるつもりで、私は縁側の上へ屹とつたつてゐた。

「どうしようかなア……、どうにもならないぢやないのッ！」

夜。

新宿の旭町の本賃宿へ泊つた。石崖の下の雪どけで、道が館このやうにこねこねしてゐる通りの旅人宿に、一泊三十錢で私は泥のやうな體を横たへることが出来た。三疊の部屋に豆ランプのついた、まるで明治時代にだつてありはしないやうな部屋の中に、明日の日の約束されてゐない私は、私を捨てた島の男へ、たよりにもならない長い手紙を書いてみた。

みんな嘘つばちばかりの世界だつた

甲州行きを終列車が頭の上を走つてゆく百商店の屋上のやうに寥々とした全生活を振り捨て、

私は木賃宿の蒲團に静脈を延ばしてゐる
列車にフンナイされた死骸を

私は他人のやうに抱きしめてみた
眞夜中に煤けた障子を明けると
こんなところにも空があつて月がおどけて
ゐた。

みなさまさよなら!

私は歪んだサイコロになつてまた逆もどり
こゝは木賃宿の屋根裏です
私は堆積された旅愁をつかむで
颯々と風に吹かれてゐた。

夜中になつても人が何時までもさうさうしく出はいりをしてゐる。
「濟みませんが……」

さういつて、ガタガタの障子をあけて、不意に銀杏返しに結つた女が、亂暴に私の薄い蒲團にもぐり込んで来た。すぐそのあとから、大きい足音がすると、帽子もかぶらない薄汚れた男が、細めに障子をあけて聲をかけた。
「オイ! お前、おきろ!」

やがて、女が一言二言何かつぶやきながら、廊下へ出て行くと、バチンと頬を殴る音が續けざまに聞えてゐたが、やがてまた外は無氣味な、汚水のやうな莫々とした静かさになつた。女の亂して行つた部屋の空氣が、仲しじまらぬ。

「今まで何をしてゐたのだ! 原籍は、どこへ行く、年は、両親は……」
薄汚れた男が、また私の部屋へ這入つて来

て、鉛筆を管めながら、私の枕元に立つてゐたのだ。

「お前はあの女と知合ひか?」
「いゝえ、不意にはいつて来たんですよ。」

クヌウト・ハムスだつて、こんな行きがかりは持たなかつたらう——。刑事が出て行くと、私は伸々と手足をのばして枕の下に入れてある財布にさはつてみた。殘金は一圓六十五錢也。月が風に吹かれてゐるやうで、歪んだ高い窓から色々な虹が私に見えてくる。——ピエロは高いところから飛び降りる事は上手だけれど、飛び上つて見せる藝當は容易ぢやない、だが何とかなるだらう、食へないと云ふことはないだらう……。

(十二月×日)

朝、青梅街道の入口の飯屋へ行つた。熱いお茶を呑んでゐると、ドロドロに汚れた労働者が駈け込むやうに這入つて来て、
「姉さん! 十錢で何か食はしてくんないかな、十錢玉一つきりしかないんだ。」

大聲で云つて正直に立つてゐる。すると、十五六の小娘が、
「御飯に肉豆腐でいゝですか。」と云つた。
労働者は急にニコニコしてバンコへ腰をかいた。

大きな飯井。葱と小開切れの肉豆腐、濁つた味噌汁。これ丈が十錢玉一つの榮養食だ。労働者は天眞に大口あけて飯を頬ばつてゐ

る。汚くましい風景だった。天井の壁には、一食十銭よりと書いてあるのに、十銭玉一つきりのこの労働者は、すなほに大聲で念を押してゐるのだ。私は涙くましい氣持ちだった。御飯の盛りが私のより多いやうな氣がしたけれど、あれで足りるかしらとも思ふ。その労働者はいたつて期かだった。私の前には、御飯にごつた煮にお新香が運ばれてきた。まことに貧しき山海の珍味である。合計十二銭也を拂つて、のれんを出ると、どうもありがたうと女中さんが云つてくれる。お茶をたらふく呑んで、朝のあいさつを交はして、十二銭なのだ。どんづまりの世界は、光明と紙一重で、ほんとに期かだと思ふ。だけど、あの四十近い労働者の事を思ふと、これは又、十銭玉一つで、失望、どんぞこ、墜落との紙一重なのではないだらうか——。

お母さんだけでも東京へ来てくれれば、何とかどうにか働きやうもあるのだけれど……沈むだけ沈んでチンポツしてしまつた私は難破船のやうなものだ。飛沫がかゝるどころではない、ザンブザンブ潮水を呑んで、結局私も昨夜の淫賣婦と、さう變つた考へも持つてゐやしない。あの女は三十すぎてゐたかも知れない。私よりも男だつたら、あのまゝ一直線にあの夜の女に溺れてしまつて、今朝はもう二人で死ぬる話でもしてゐたかもしれぬ。

晝から荷物を宿屋にあづけて、神田の職業紹介所に行つてみる。

どこへ行つても砂原のやうに寥々とした思ひをするので、私は胸がつかまつた。
(お前さんに使つてもらふんぢやないよ。)
おたんちん!
ひよつとこ!
馬鹿野郎!

何と冷たい、カウマンチキな女達なのだらう——。
桃色の吸取紙のやうなカードを、紹介所の受付の女に渡すと、

「月給三十圓位ですつて……」
受付女史はかうつぶやくと、私の顔を見て、せうら笑つてゐるのだ。

「女中ぢやいけないの……事務員なんて、女學校出がうらうらしてゐるんだから駄目よ、女中なら澤山あつてよ。」

後から後から美しい女の群が雪崩れて來てゐる。まことにごもつともさまなことです。少しも得るところなし。

紹介状は、墨汁會社と、ガソリン嬢と、伊太利大使館の女中との三つだった。私のふところには、もう九十銭あまりしかないのだ。夕方宿へ歸ると、藝人達が、植木鉢みたいに鏡の前に並んで、鼠色の白粉を顔へ塗りたくつてゐる。

「昨夜は二分しか賣れなかつた。」

「藪^{やぶ}睨みぢやア買手がねえや！」
「へん、これだつていゝつて人があるんだから……」

「ハイ御苦勞様なことですよ。」
十四五の娘同士のはなしなり。

(十二月×日)

こみあげてくる波のやうな哀しみ、まるで狂人になるやうな錯覺がおこる。マッチをすつて、それで眉ずみをつけてみた。——午前十時。麹町三年町の伊太利大使館へ行つてみた。

笑つて暮らさせよう。でも何だか顔がゆがみます。——異人の子が馬に乗つて門から出てきた。門のそばにはこはれた門番の小屋みたいなものがあつて、綺麗な砂利が遠い玄關までつゞいてゐる。私のやうな女の來るところではないやうに思へた。地團のある、赤いジュエターの廣い室に通された。白と黒のコーステュウム、異人のおくさんつて美しいと思ふ。遠くで見えてゐるとなほさら美しい。さつき馬で出て行つた男の子が鼻を鳴らしながら歸つて來た。男の異人さんも出て來たけれど、大使さんではなく、書記官だとかつて云ふ事だった。夫婦とも背が高くてアツパクを感じる。その白と黒のコーステュウムをつけた夫人にコック部屋を見せてもらった。コンクリートの箱の中には玉葱がゴロゴロしてゐて、七輪が二つ置いてあつた。この七輪で、

女中が自分の食べるのだけ煮たきをするのだと云ふことだ。まるで廢屋のやうな女中部屋である。黒い鏡戸がおりてゐて石鹼のやうな外國の臭ひがしてゐる。

結局えうりやうを得ないまゝで門を出てしまつた。豪壯な三年町の邸町を抜けて坂を降りると、吹きあがる十一月の風に、商店の赤い旗がヒラヒラしてゐて心にしみた。人種が違つては人情も判りかねる。どこか他をさがしてみようかしら、電車に乗らないで、堀ばたを歩いてゐると、何となく故郷へ歸りたくなつて來た。目當もないのに東京でまごついてゐたところで結局はどうにもならないと思ふ。電車を見てゐると死ぬる事を考へるなり。

本郷の前の家へ行つてみる。叔母さんつめたし。近松氏から郵便が來てゐた。出る時に十二社の吉井さんのところに女中が入用だから、ひよつとしたらあなたを世話してあげようと思ふ先生の言葉だつたけれど、その手紙は薄ずみで書いた斷り状態だつた。

文士つて薄情なのかも知れない。夕方新宿の街を歩いてゐると、何と云ふこともなく男の人にすがりたくなつてゐた。

(誰か、このいまの私を助けてくれる人はないものかしら……) 新宿驛の陸橋に、紫色のシゲナルが光つてゆれてゐるのをちつと見てゐると、涙で臉がふくらんできて、私は子供やうにしやつくりが出てきた。

何でも當つてくだけてみよと思ふ。宿屋

の小母さんに正直に話をしてみた。仕事がつかるまで、下に一緒にゐていよと言つてくれた。

「あなた、青バスの車掌さんにならないかね、いゝのになると七十圓位這入るさうだが……」

どこかでハタハタでも働いてゐるのか、とても臭いにはひが流れて來る。七十圓もはいれば素敵なことだ。とにかくブラさがるところをこしらへなくてはならない……。十燭の電氣のついた帳場の炬燵にあたつて、お母さんへ手紙を書く。

——ピヤウキシテ、コマツテ、キルカラ、三圓クメンシテ、オクツテクダサイ。

此間の淫賣婦が、いなりずしを頬ばりながらはいつて來た。

「を」とつひはひどいめに會つた。お前さんめだらしがないよ。」

「お父つあん怒つてた？」
電氣の下で見ると、もう四十位の女で、乾いたやうな崩れた姿をしてゐた。

「私の方やあんなのを最と云つて、色んな男を夜中に連れ込んで來るんだが、あんまり有りがたい客ぢやあないんですよ。お父つあん、油をしぼられてブンブン怒つてますよ。」
人の好きさうな老けたお上さんは、茶を淹れながらあの女の事を悪く云つてゐた。

夜、お上さんにうどんを御馳走になる。明日はこゝの小父さんのくちぞへで青バスの車庫へ試験をうけに行つてみよう。暮れちかくなつて、落ちつき場所のない事は淋しいけれど、クヨクヨしてゐても仕様のない世の中だ。すべては自分の元氣な體をたのみに働かませう。電線が風ですさまじく鳴つてゐる。木賃宿の片隅に、この小さな私は、汚れた蒲團に寝ころんで、壁に張つてある大黒さんの顔を見ながら、雲の上の御殿のやうな空想をしてゐる。

(國へかへつてお嫁にでも行かうかしら……)

(四月×日)

今日はメリヤス屋の安さんの案内で、地割りをしてくれるのだと云ふ親分のところへ酒を一升持つて行く。

道玄坂の漬物屋の路地口にある、土木請負の看板をくゞつて、綺麗ではないけれど、拭きこんだ格子を開けると、いつも晝間場所割りをしてくれるお爺さんが、火鉢の傍で茶を喫つてゐた。

「今晚から夜店をしなさるつて、晝も夜も出しやあ、今に銀行が建ちませうよ。」
お爺さんは人のいゝ高笑ひをして、私の持つて行つた一升の酒を氣持ちよく受取つてくれた。

誰も知人のない東京なので、恥かしさも羨もあつたものではない。ピンからキリまである東京だもの。裸になりついでに、うんと働いてやりませう。私はこれよりもつと辛かつた菓子工場の事を思ふと、こんなことなんか平氣だと氣持ちが晴れ晴れとしてきた。

夜。

私は女の萬年筆屋さんと、當のなない門札を書いてゐるお爺さんの間に店を出さして貰つた。蕎麥屋で借りた兩戸に、私はメリヤスの猿股を並べて「二十錢均一」の札をさげると、萬年筆屋さんの電氣に透して、ランデの死を讀む。大きく息を吸ふともう春の氣配が感じられる。この風の中には、遠い遠い憶ひ出があるやうだ。鋪道は灯の川だ。人の洪水だ。灘戸物屋の前には、うらぶれた大學生が、計算器を賣つてゐた。「諸君！ 何萬何千何百に何千何百何十加へればいくらになる。皆判らんか、よくもこんなに馬鹿がそろつたものだ。」

澤山の群集を相手に高飛車に出てゐる、こんな商賣も面白いものだと思ふ。

お上品な奥様が、猿股を二十分も捻つてゐて、たつた一ツ買つて行つた。お母さんが辨當を持つて来てくれる。暖かになると、妙に着物の汚れが目になつてくる。母の着物も、さくられて来た。木綿を一反買つてあげよう。

「私が少しかはるから、お前は、御飯をお上

り。」

お新香に竹輪たけのこの煮つけが、瀬戸の重ね鉢にはいつてゐた。鋪道に背中をむけて、茶も湯もない食事をしてゐると、萬年筆屋の姉さんが、「そこにもある、こゝにもあると云ふ品物では、ございませぬ。お手に取つて御覽下さいませ。」

と大きい聲で言つてゐる。

私はふつと鹽つばい涙がこぼれて来た。母はやつと一息ついた今の生活が嬉しいのか、小聲で時代色のついた昔の唄を歌つてゐた。九州へ行つてゐる義父さへこれによくやつてゐたら、當分はお母さんの唄ではないが、たつたかたのただらう。

(四月×日)

水の流れのやうな、薄いシヨールを、街を歩く娘さん達がしてゐる。一つあんなのを欲しいものだ。洋品店の四月の窓飾りは、金と銀と櫻の花で目がくらむなり。

空に擴がつた櫻の枝に

うつすらと血の色が染まると

ほら枝の先から花色の糸がさがつて
情熱のくじびき

食へなくてポードビルへ飛び込んで
襟で踊つた踊り子があつたとしても

それは櫻の罪ではない。

ひとすぢの情

ふたすぢの義理

ランマンと咲いた青空の櫻に
生きとし生ける

あらゆる女の
裸の唇を

するすると奇妙な糸がたぐつて行きます。

貧しい娘さん達は
夜になると

果物のやうに唇を

大空へ投げるのですつてさ

青空を色どる桃色櫻は
かうしたカレンな女の

仕方のないくちづけなのですよ
そつぽをむいた唇の跡なのですよ。

シヨールを買ふ金を貯めることを考へたら、仲々大變なことなので割引の映畫を見に行つてしまつた。フィルムは鐵路の白バラ、

少しも面白くなし。途中雨が降り出したので、小屋から飛び出して店に行つた。お母さんは莫座をまとめてゐた。いつものやうに、

二人で荷物を背負つて驛へ行くと、花見歸りの金魚のやうなお嬢さんや、紳士達か、夜の

驛にあふれて、あつちにもこつちにも藻のや